

格助詞「に」と「で」の深層格

—出現状況把握に向けての問題点の整理—

丸 山 直 子

1. はじめに

深層格については、これまで多くの人によって研究が行われているが、人によって捉え方が異なる。使用実態についての報告はあまりなされてこなかったが、松田 (2014) (2015) がコーパスに基づいた大規模な調査を行い、報告を行った。これまでも出現状況の報告が全くなかったわけではなく、森山新 (2008) が母語話者の使用と学習者の使用の差について報告を行っており、さらに遡って、国立国語研究所 (以下「国語研」と記載する) (1997) は国定教科書における出現状況を報告している。どれも、実際に使われる深層格は何かという観点からの報告であるが、三者の分布は大きく異なっている。本稿では、これまでの深層格研究を踏まえ、深層格を考える際の問題点を明らかにすることを目標とする。

扱うのは二格とデ格である。二格は最も深層格の種類が多い格である。デ格は二格ほどではないが、二格と類似した深層格を有する。二つの格を扱うことで、深層格の問題点を明らかにしたい。

2. 深層格の出現状況

松田 (2014) は、Web コーパス¹・京大コーパス²・BCCWJ³を合わせて約3万個

1 工藤拓・賀沢秀人 (2007) Web 日本語 N グラム 第1版, 言語資源協会 <http://www.gsk.or.jp/catalog/gsk2007-c/>

2 京都大学テキストコーパス (黒橋・河原研) <http://nlp.ist.i.kyoto-u.ac.jp/index.php?> 京都大学テキストコーパス

3 国立国語研究所現代日本語書き言葉均衡コーパス BCCWJ http://pj.ninjalac.jp/corpus_center/bccwj/

の二格成分を対象とし、松田（2015）は Web コーパスのみを対象に約 2 万個のデ格成分を対象としている。森山新（2008）は上村コーパス⁴から約 300 個の二格成分、約 200 個のデ格成分を、国語研（1997）は第四期国定読本（1933（昭和 8）年）から抜き出した約 4,000 個の二格成分、約 700 個のデ格成分を対象としている。二格について、三者の出現状況を円グラフにすると、図 1、図 2、図 3 のようになる。図 1 は松田（2014）に掲載されているものであり、図 2、図 3 は筆者が図式化した。

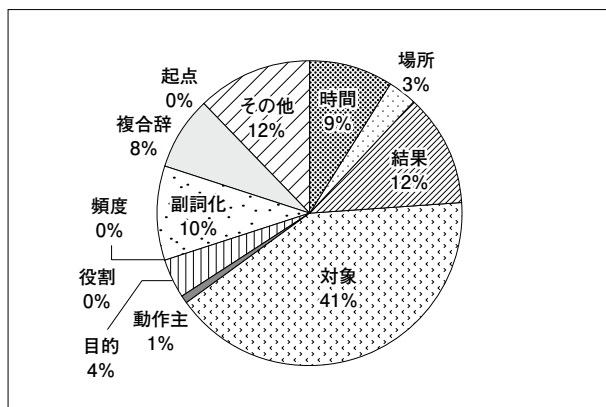


図 1 松田（2014）の二格

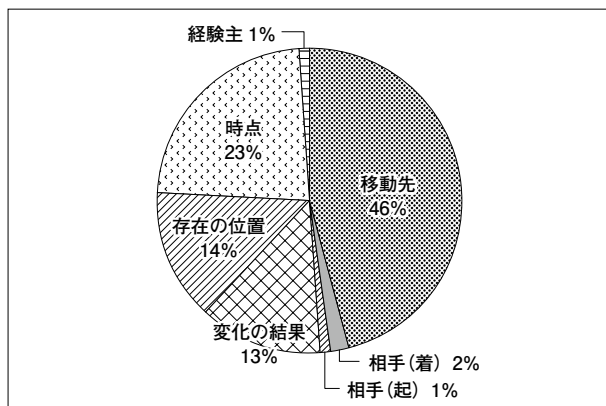


図 2 森山新（2008）の二格（母語話者 上村コーパス）

4 インタビュー形式による日本語会話データベース（上村コーパス）<http://www.env.kitakyu-u.ac.jp/corpus/>

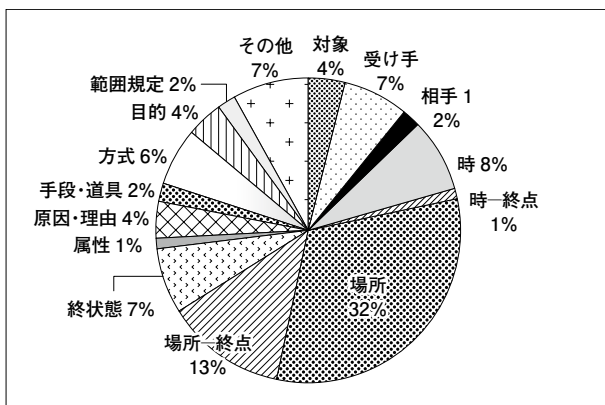


図3 国語研 (1997) の二格

三者の分布は全く異なる。多い順に挙げると以下のようになる。

松田：対象 (41%) > 結果 (12%)・その他 (12%) > 副詞化 (10%) > 時間 (9%)

森山新：移動先 (46%) > 時点 (23%) > 存在の位置 (14%) > 変化の結果 (13%)

国語研：場所 (32%) > 場所-終点 (13%) > 時 (8%) > 終状態 (7%)・受け手 (7%)

デ格の方を図示すると、図4、図5、図6のようになる。三図とも筆者が図式化した。森山新と国語研は、場所が多いという点では似ている。

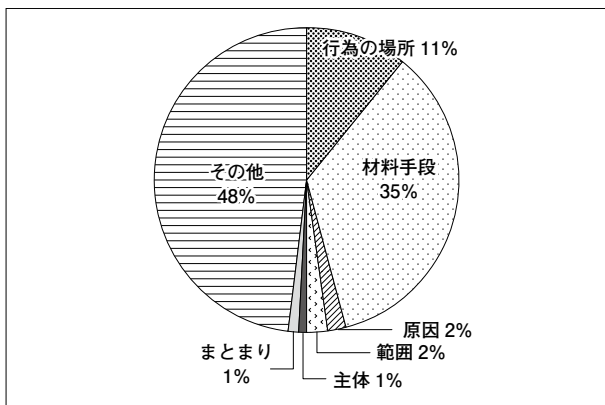


図4 松田 (2015) のデ格

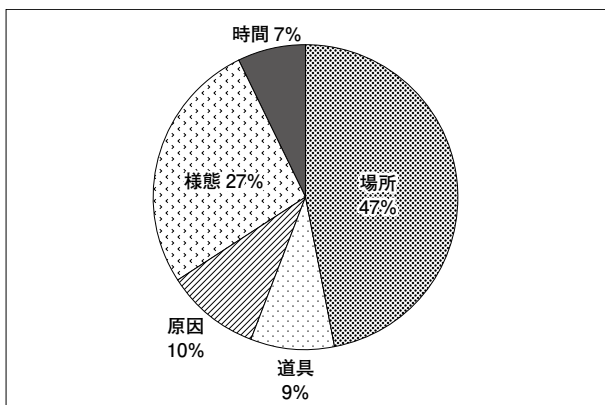


図5 森山新 (2008) のデ格 (母語話者 上村コーパス)

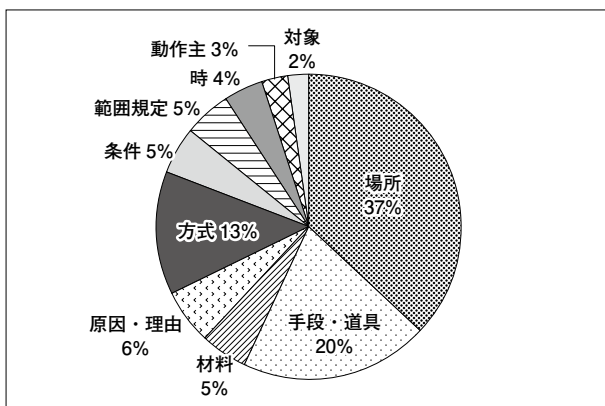


図6 国語研 (1997) のデ格

多い順に挙げると以下のようになる。

松田：その他 (48%) > 材料手段 (35%) > 行為の場所 (11%)

森山新：場所 (47%) > 様態 (27%) > 原因 (10%) > 道具 (9%)

国語研：場所 (37%) > 手段・道具 (20%) > 方式 (13%)

三者の分布が異なる理由はいくつか考えられる。一つは深層格の設け方の問題である。二格において、松田の「対象」は、森山新にはない。国語研に「対象」はあるが、指す範囲がずっと小さい。逆に松田には、森山新、国語研にある「相手」がない。松田の「対象」には、森山新・国語研が「相手」としているものが含まれている。松田の調査に「対象」が多いのは、「対象」に多くのものを含めているからであると思われる。

もう一つは調査対象の違いである。森山新（2008）の本文に、上村コーパスは「いつ」かを聞く質問が多いために「時点」が多くなっているという記述があるが、「移動先」についても調査対象の性質が影響している可能性がある。

コーパスごとの特徴を見るためには、統一した枠組みを用いる必要がある。どのような枠組みが妥当か、また、枠組みを作る上での問題点は何かを明らかにしたい。

3. 深層格についてのこれまでの研究

深層格は、多くの人によって考察されてきたが、本稿では、主に次の文献を比較対照する。発表年順に掲げる。

奥田（1983）、仁田（1986）、森山卓郎（1988）、丸山（1990）、村木（1991）、水谷（1996）、国語研（1997）、石綿（1999）、加藤（2003）、森山新（2008）、日本語記述文法研究会（以下「記述文法研」と記載する）（2009）、松田（2014）（2015）

分類の仕方は、なるべく大きく捉えようとするもの（例えば、丸山（1990）・水谷（1996））と、なるべく細かく捉えようとするもの（例えば国語研（1997））がある。丸山（1990）では、主格・対格・客格・基格・具格・場格・時格の七種を設けた。二格に関して丸山（1990）が設けた格は以下の通りである。中核的か周辺的かの記述も行った。

中核的な格：客格 1（動作作用の向けられる対象）、客格 2（到達する地点）、客格 3（到達する状態）、客格 4（状態）

基格 1（基準となる事物）、基格 2（割合・割当の基礎）

中間：基格 3（理由）、基格 4（目的）、場格

周辺的な格：時格

テ格については、以下のものを提示した。

中核的な格：なし

中間：基格 1（材料）

周辺的な格：基格 2（理由・根拠・原因・動機）、具格、場格、時格

これに対して国語研（1997）では、二格に対しては、フラットに 27 個の深層格を設け、デ格に対しては 14 個設けている。図 3、図 6 では数の少ないものの表示は省略した。

また、全体像を示した最新のものとして記述文法研（2009）がある。二格を上、デ格を下に掲載する。若干階層構造になっている。

二格 着点－移動の着点（到達点、接触点）、変化の結果
相手－動作の相手、授与の相手、受身的動作の相手、基準としての相手
場所－存在の場所、出現の場所
起因・根拠－感情・感覚の起因、継続的状態の起因
主体－状態の主体－所有の主体、能力の主体、心的状態の主体
対象－動作の対象、心的活動の対象
手段－内容物、付着物
時－時点－時名詞、期間名詞
領域－認識の成り立つ領域
目的－移動の目的
役割－名目
割合

デ格 場所－動きの場所
手段－道具、方法、材料、構成要素、内容物、付着物
起因・根拠－変化の原因、行動の理由、感情・感覚の起因、判断の根拠
主体－動きの主体
限界－範囲の上限
領域－評価の成り立つ領域
目的－動作の目的
様態－動きの様態

筆者は、記述文法研（2009）の枠組みを用いてコーパス調査を行おうとした。しかし、この分類では二格・デ格の深層格全体をカバーしきれないことがわかったので、現在改変を試みている。改変に当たって、石綿（1999）に倣って、二格とデ格について、これまでの各説の重ね合わせを行った。その際、記述文法研（2009）を

下敷きとし、それを少し改変した枠組みの中で整理した。

3. 1. 諸説の重ね合わせ 二格

本稿で、二格の基本的な枠組みとして設定したのは、以下のものである。

場所—存在の場所、主体（所有の主体、能力の主体、心的状態の主体）
—領域、割合
着点—移動の着点（到達点、接触点）、変化の結果
相手—動作の相手、与え手、受身の相手、使役の相手、基準としての相手
対象—動作の対象、心的活動の対象
起因・根拠
手段—内容物、付着物
内容規定
目的規定—目的、役割
様態規定
時

「主体」「領域」「割合」を「場所」に入れるのは、これらは広く捉えれば、場所の用法であると判断したためである。また、記述文法研（2009）にはないものもいくつか加えている。「相手」の「与え手」「使役の相手」、「内容規定」「様態規定」である。以下、重ね合わせの結果を掲げる。該当二格成分に下線を付した。

1) 場所

1-1 存在の場所

机の上に本がある：場所—存在の場所〔記述文法研〕

ありか（存在のむすびつき）〔奥田〕／ありか〔仁田〕／空間的場所〔村木〕／

場所〔国語研〕／存在の場所〔石綿〕⁵／存在の場所〔加藤〕

大学に委員会を設ける：非空間的場所〔村木〕

5 石綿（1999）では、この二格を取り得る述語として、「ある・いる」（状態述語）、「すむ・とまる」（人の行為）、「たたずむ・たてる」（人の行為）、「かざる・おく」（設置）、「のこる」（出現消滅）、「はえる」（自然）、「この容器には1リットルの水がはいる」等を挙げている。

あごに髭が生える：場所－出現の場所 [記述文法研]／出現物のありか [奥田]

銀座うらに店をもっている：所有物のありか [奥田]

家々を両岸に見つつ：認知物のありか [奥田]

ステージに幕を垂らした：ありか (対象) [仁田]⁶

名簿に名前が落ちている、彼は選に漏れた：ありか (場所) [仁田]⁷

父は天井にかごを吊るした：出どころ－ありか (場所) (対象) [仁田]⁸

1-2 主体

1-2-1 所有の主体

私には大きな夢がある：主体－状態の主体－所有の主体 [記述文法研]

非空間的位置 [村木]／経験者 (所有) [国語研]／所有者 [石綿]／
所有主 [森山新]

1-2-2 能力の主体

この子には専門書が読めない：主体－状態の主体－能力の主体 [記述文法研]

経験者 (可能・要求) [国語研]／能力主 [森山新]／動作主 [松田]

あなた方にはご用のないもの：経験者 (可能・要求) [国語研]

1-2-3 心的状態の主体

私には弟の成功が嬉しい：主体－状態の主体－心的状態の主体 [記述文法研]

観点 [国語研]／動作状態のゆきつくまたはかかわる受身的な人 [石綿]⁹／
感情主・知覚主 [森山新]

1-2-4 敬意の主体

先生には御健勝に渡らせられ：場格－所謂敬語として [水谷]

1-3 領域

私には山本さんの意見は刺激的だ：領域－認識の成り立つ領域 [記述文法研]

子供にあぶない：観点 (観点・立場) [国語研]

計算能力に優れる：領域 [仁田]／範囲 (ノ点デ) [村木]／範囲規定 [国語研]

この子は技術者に向いている、常識に欠ける、勝負に勝った：領域 [仁田]

6 対象か場所か。両方の捉え方が可能な例である。

7 「名簿」や「選」は場所か。地名、場所名詞以外のものも場所として捉えられる。

8 二つの役割を持っている。「出どころ」であり、「ありか」である。「場所」であり「対象」である。

9 石綿 (1999) は、この二格を取る述語として、認知 (みえる)、感覚 (においがする)、感情 (ありがたい) を挙げている。

首相にふさわしい人物：基格－着目する（立場・人物・観点）〔水谷〕

熱に強い：抽象的基点〔森山新〕

数学に疎い、勉強に熱心だ：客格－在り方の向く面〔水谷〕

動作状態のゆきつく対象〔石綿〕／状態の対象〔加藤〕¹⁰

1-4 割合

1週間に2日は酒を飲んでいる：割合〔記述文法研〕

基格－規準量〔水谷〕／時間（当り）〔国語研〕／頻度〔松田〕

一鉢に一本ずつ：条件〔国語研〕

2) 着点

2-1 移動の着点

2-1-1 到達点

子供が学校に行く、大阪に着く：着点－移動の着点－到達点〔記述文法研〕

場所・終点〔国語研〕／ゆく先・ありか〔仁田〕／空間的着点〔村木〕

移動の着点〔石綿〕／着点〔加藤〕／移動先（自動詞文）〔森山新〕

子供を学校にやる、海にボールを投げた：移動先（他動詞文）〔森山新〕

2-1-2 接触点

糸くずが服につく：着点－移動の着点－接触点〔記述文法研〕

ゆく先（空間的場所）〔仁田〕

2-2 変化の結果

信号が青に変わる：着点－変化の結果〔記述文法研〕

ゆく先（状態）〔仁田〕／非空間的着点〔村木〕／終状態〔国語研〕／

変化の結果〔石綿〕／変化の結果〔森山新〕／結果〔松田〕

3) 相手

3-1 動作の相手

隣の人に話しかける、見せる：動作の相手〔記述文法研〕

相方〔仁田〕／相方・ゆく先〔仁田〕／相手〔村木〕／受け手〔国語研〕／

動作のゆきつく相手〔石綿〕／動作の相手〔加藤〕

おばあさんが孫に絵本をやる：授与の相手〔記述文法研〕

10 領域か対象か。石綿（1999）、加藤（2003）では、対象とする。

3-2 与え手

おじいちゃんにもらっためがね：与え手〔国語研〕

3-3 受身の相手（動作主）

犯人が警察に捕まった、殴られた：受身的動作の相手〔記述文法研〕

相方・主〔仁田〕／動作主〔国語研〕／受動文に現れる「に」〔加藤〕

3-4 使役の相手（動作主）

信次に行かせる：使役文に現れる「に」〔加藤〕／動作主〔国語研〕

3-5 基準としての相手

体格が大人にまさる：相手－基準としての相手〔記述文法研〕

めあて（基準）〔仁田〕／比較の基準〔国語研〕／比較の基準・限界〔石綿〕

平地に同じ：比較の基準〔国語研〕／比較・異同判断の相手〔石綿〕¹¹

家に近い：空間的基点〔森山新〕／対象〔松田〕

父に似る：めあて（基準）〔仁田〕／関連〔村木〕／相手1〔国語研〕／対象〔松田〕

4) 対象

4-1 動作の対象

親にさからう：対象－動作の対象〔記述文法研〕

めあて（基準）〔仁田〕／対象（行為・思考・感情）〔国語研〕／

動作のゆきつく対象〔石綿〕／動作の対象〔加藤〕

学生の要求に応じた：めあて（相手）〔仁田〕

結婚式に金をかける：めあて〔仁田〕

4-2 心的活動の対象

先輩にあこがれる：対象－心的活動の対象〔記述文法研〕

状態が関係し、ゆきつくさきとしての相手〔石綿〕¹²／動作の対象〔加藤〕

親に甘える：態度の対象〔村木〕／対象〔松田〕

5) 起因・根拠

職員の横柄な態度に腹を立てる：起因・根拠－感情・感覚の起因〔記述文法研〕

11 石綿（1999）は、この二格を取る述語として、「くらべる」「おなじ」「にあう」を挙げている。

12 石綿（1999）は、この二格を取る述語として、「ひとに親切だ」「やさしい」「あこがれる」「ほれる」を挙げている。相手が対象か。

基因 [仁田] / 起因 [村木] / 原因 [石綿] / 原因 [森山新] / 対象 [松田]
潮風に帆が揺れていた：起因・根拠—継続的狀態の起因 [記述文法研]

6) 手段

6-1 内容物

新入生の顔は希望にあふれている：手段—内容物 [記述文法研]

6-2 付着物

全身が泥にまみれる：手段—付着物 [記述文法研]

7) 内容規定

舞姫にきめる：内容規定 [国語研] / 同定項 [仁田]¹³ / 非空間的着点 [村木]
百倍に当たる：陳述 [国語研]

8) 目的規定

8-1 目的

母が買い物に行く：目的—移動の目的 [記述文法研] / 移動動作の目的 [加藤]
取り入れにはげむ：目的 [国語研] / めあて (相手) [仁田]
消毒にアルコールを用いた：めあて (目的) [仁田]
目的規定 [奥田] / 動機 [村木] / 動作狀態のゆきつく目的 [石綿]¹⁴ /
動作の目的 [森山新] / 目的 [松田]
頭痛にきく薬：客格—目的 [水谷]¹⁵

8-2 役割

お礼に手紙を書く：役割—名目 [記述文法研] / 客格—役目 [水谷] / 役割 [国語研]

9) 樣態規定

からだのわりに目が小さい：条件 [国語研]

13 仁田 (1986) は、この二格の例として、「出発日を五月にきめる」「大統領候補に立った」「彼は課長に終わった」「A 氏を会長に推した」を挙げている。

14 石綿 (1999) は、この二格を取る述語として、移動の目的 (ゆく)、人の行為 (もちいる)、狀態 (必要だ、便利だ) を挙げている。

15 目的か領域か。

静かに見る、ふつうに歌う：連用成分を示す「に」[加藤]¹⁶

10) 時

1時に事務所に来てください：時点－時名詞 [記述文法研] ／時 [国語研]

午前中に用事を済ませた：時点－期間名詞 [記述文法研]

3. 2. 諸説の重ね合わせ デ格

本稿で基本的な枠組みとして設定したのは、以下のものである。

場所－動きの場所、領域、主体

手段－道具、手段・方法、材料

－構成要素－構成要素、内容物、付着物

起因・根拠－原因・理由－行動の理由、感情・感覚の起因

－根拠

－目的

様態規定－動作主の様態、被動作主の様態、出来事・作用の様態、数量限定

時

「領域」「主体」を「場所」に入れるのは、二格と同様である。記述文法研(2009)にはないものとしては、「時」がある。

1) 場所

1-1 動きの場所

庭で犬が吠えている：場所－動きの場所 [記述文法研]

場格－場所や時（抽象的位置）[水谷] ／場所－場所 [森山新] ／

場所－動作や行為の行われる場所 [加藤] ／行為の場所 [松田]

彼は社会主義の環境で育ちました：場所－場 [森山新]

1-2 領域

富士山が日本でいちばん高い山だ：領域－評価の成り立つ領域 [記述文法研]

宝石のなかで一番固い：範囲規定 [国語研] ／場所－範囲 [森山新]

16 これは一般的に格成分ではない。「連用成分」「副詞成分」と呼ばれるものである。

私たちの大学で改革に反対する人はむしろ少数でした：限定的な範囲 [加藤]

競馬で負ける、試験で満点をとる：場所－抽象的な領域や分野 [加藤]

私の考えでは、長い方がよいかと存じます：陳述 [国語研]

1-3 主体（動作主・経験者）

私と佐藤でその問題に取り組んだ：主体－動きの主体 [記述文法研]

警察で取り調べる：動作主 [国語研] / 場格－関連して注目するもの [水谷] /

動作主体 [加藤] / 場所－動作主 [森山新] / 主体 [松田]

役場の方でお忘れになったのではなからうか：経験者 [国語研]

2) 手段

2-1 道具

ナイフでチーズを切る：手段－道具 [記述文法研]

具格－手段 [水谷] / 手段 [村木] / 手段・道具 [国語研] / 道具・手段 [加藤] /

道具－道具 [森山新] / 材料手段 [松田]

顔を両手で覆う：部分 [村木]

ウィスキーを炭酸で割る：手段 [仁田]

砂糖を水で溶かす：ありか・手段 [仁田]¹⁷

2-2 手段・方法

遠近法で図を描く：手段－方法 [記述文法研]

月賦で買う：規定的－方法 [奥田]

2-3 材料

千代紙で鶴を折る、このつくえは木でできています：手段－材料 [記述文法研]

出どころ（材料－状態） [仁田] / 材料 [国語研] / 材料 [加藤] /

道具－材料 [森山新] / 材料手段 [松田]

2-4 構成要素

2-4-1 構成要素

委員会は5人のメンバーで構成される：手段－構成要素 [記述文法研]

構成要素 [国語研] / 材料手段 [松田]

2-4-2 内容物

会場が人でいっぱいになる：手段－内容物 [記述文法研]

17 二つの役割を兼ねている。

2-4-3 付着物

服がホコリで汚れる：手段－付着物〔記述文法研〕

3) 起因・根拠

3-1 原因・理由

強い風で看板が倒れた：起因・根拠－変化の原因〔記述文法研〕

原因・理由〔国語研〕

急用で家へ帰った：起因・根拠－行動の理由〔記述文法研〕／原因－原因〔森山新〕

友人とのことで悩んでいる：起因・根拠－感情・感覚の起因〔記述文法研〕

だれなのか、甲高い声でわかった：起因・根拠－判断の根拠〔記述文法研〕

彼のアイデアは、その点でおもしろいと思います：原因－理由〔森山新〕

テストの結果でクラスを決めようと思います：原因－根拠〔森山新〕

場格－原因・動機・根拠〔水谷〕／基因〔仁田〕／原因〔加藤〕／原因〔松田〕

3-2 目的

観光で京都を訪れた：目的－動作の目的〔記述文法研〕

目的〔国語研〕／原因－目的・動機〔森山新〕¹⁸

4) 様態規定（動作主の様態、被動作主の様態、出来事・作用の様態、数量限定）

裸足で歩く：様態－動きの様態〔記述文法研〕

独身で通す：資格〔村木〕／規定的－資格〔奥田〕／同定項〔仁田〕

無名の詩人で終わる：場格－在り方・有様〔水谷〕／同定項〔仁田〕

三日で仕上げる：条件〔国語研〕／場格－場所や時（抽象的位置）〔水谷〕¹⁹

全体で約 82 メートル：条件〔国語研〕

先着 30 名で締め切る：限界－範囲の上限〔記述文法研〕

同定項〔仁田〕／様態－数量限定〔森山新〕

5) 時

5 時で閉まる：時〔国語研〕

食事のあとで、勉強します：時間－時間〔森山新〕

18 原因か目的か。どちらとも言える。

19 時か範囲か手段か。

成長の過程でときどき見られる現象です：時間一期間〔森山新〕

長かった夏休みも明日で終わりです：時間一時限定〔森山新〕

4. 諸説の関係 一致するものと一致しないもの

ニ格・デ格に次の深層格が存在することは、用語が異なっても概ね一致している。

ニ格 ①存在の場所（存在の位置） ②到達点（ゆく先）

③変化の結果（結果の状態）④起因・根拠（原因・理由）⑤目的 ⑥時

デ格 ①動作の場所 ②手段・道具 ③材料 ④起因・根拠（原因・理由）

⑤時

一致しないものには、どのようなものがあるか。まず、「場所」について、典型的な地名や場所名詞が来るものは問題ないが、どこまでを場所と考えるかに違いが生じる。場所の中に、場所的場所、空間的場所、非空間的場所等を設けることがある。出現の場所、接着の場所を分ける場合もある。接着の場所は到達点に近づく。範囲・領域を場所に含めるか別建てするかということにも違いが生じる。「領域」はかなり厄介で、対象として捉えられる場合もある。「彼に勝つ」なら「基準としての相手」、「試合に勝つ」なら「領域」になる。「勉強に熱心だ」の場合は領域というよりは対象としての色彩が濃くなる。「警察で調べる」のようなものは、場所か動作主か手段か、ゆれが生じる。

「相手」と「対象」は、何を相手にし、何を対象にするか人によって異なる。2.で述べたように、森山新は「対象」を設けず、松田は「相手」を設けていない。

「相手」の中に、「起点（出どころ）」と「終点（ゆく先）」がある。「彼に話す、教える」等は、情報のゆく先として「彼」が存在するが、「彼に聞く、彼に教わる」では逆である。情報の出どころと言える。カラ格に似てくる。「天井に吊るす」の場合、仁田は「出どころ－ありか」という表記を用いるが、「ありか」であり、「出どころ」であるという解釈である。両方の役割を担う場合がある。ただ、二を用いたときは「ありか」としての意味合いが強くなると思われる。カラを用いると「出どころ」になる。しかし、両者の間に表現している事象としての違いはあまり存しない。捉え方が異なるだけである。

「変化の結果」と「内容規定」との境目も問題となる。「出発を夕方に決めた」の場合、出発時間を夕方にするということで、「する」という変化を重んじるなら「変化の結果」、夕方であるという「内容」を重視するなら「内容規定」になる。ど

ちらともとれる場合が実際には多く見られる。

デ格において、「原因」と「目的」、「原因」と「様態」、「手段」と「様態」の判断に迷うものがある。「時」と「基準」も判断がむずかしいものがある。

かつて、基格か具格かの判断に迷った。丸山（1990）では、「材料」を基格としているが、これはカラとの互換性も考え、何かを基に何かができるということから、具格ではなく、基格とした。だが、水谷（1996）では具格である。他の研究においても、「材料」は、「手段」の仲間である。

これらは、いくつかの側面から整理できる。1）捉え方によって、どちらに分類するか迷うもの。どちらとも取れるという捉え方の問題（事象は変わらない）、2）どちらでもあるという場合（兼ねている）、3）どちらと解釈するかで表している事象が変わる場合がある。

次節で、深層格設定における問題点を、少し大きな観点から整理する。

5. 深層格設定における問題点

5. 1. 典型的なものと典型的でないもの、複数の捉え方ができるもの

語現象の分類には、必ず典型的なものとグレーのものが存在する。その段階性を上手く説明できることが望ましい。また、同じ事象について、複数の捉え方ができる場合がある。「冷蔵庫で冷やす」は場所か手段か。両方の捉え方が可能であろう。冷やすもののありかという点では場所だが、何を使って冷やすかという観点からすれば手段である。どちらで捉えても事象そのものは変わらない。地名（「東京」など）や場所名詞（「庭」など）は場所らしい場所だが、「冷蔵庫」のように物になると対象性を帯びる。このような場合に、どちらかに無理やり所属させるのではなく、両方の解釈が可能であるということを記述できる体系が望ましい。その場合の両方の解釈とは、どちらの解釈を取るかで事象が変わるものではない。5.3. で扱うものとは異なる。山梨（1993）に「格解釈のゆらぎ」についての言及がある。具格と原因格の間の解釈のゆれが最も大きいと述べられており、「カギでドアをあける」が最も具格的、「ガンで死ぬ」が最も原因格的で、その間に「片足で立つ」のような様態的なものを挟んで段階的に位置づけている。このような指摘はあるが、このような立場からの、全ての格についての詳細な記述はまだない。

5. 2. 他の助詞との関係

言い換え可能な助詞との関係を見ると、例えば「天井に吊るす」「天井から吊るす」は、表している事象は同じである。カラは起点として捉えていることが明示されている。ニは存在の場所として提示されていると言える。しかし事象としては同じなので、仁田（1986）は「出どころ－ありか」という複合的な捉え方をした。

「彼にもらう」「彼からもらう」はどうであろうか。これも表している事象は同じである。カラは起点としての位置づけをはっきりさせる物言いである。この二格成分は起点としての「与え手」（「相手」の一種）である。ニで表される「相手」には起点としての相手と着点としての相手がある。

同じニとカラを使った表現でも、「東京に行く」と「東京から行く」では、事象そのものが異なる。ニは着点、カラは起点である。このように対比的に使われる場合もある。このような場合は、どちらの助詞を用いるかで、表している事象そのものが変わる。

今回扱ったニとデに関して述べると、共通する深層格としては、「場所」「主体」「領域」「起因・根拠」「手段」「目的」「時」がある。「場所」は一般に二格は「存在の場所」、デ格は「動作の場所」を表すと言われる。同じ「場所」でも違いがあるということである。「領域」「起因・根拠」「手段」においては、殆ど違いがわからないものもある。「試合に／で勝つ」「突然の来客に／で驚く」「希望に／であふれている」など。どのような場合に違いが顕著で、どのような場合に殆ど同じ意味になるか明らかにする必要がある。

5. 3. 同じ表現で複数の全く異なる意味をもつ場合

5. 2. では、異なる助詞を用いて同じ事象を表しているものを見たが、ここではその逆で、同じ助詞なのに、異なる事象を表すものを挙げる。「会長に推薦される」には二通りの意味がある。「会長から推薦される」という意味と、「会長という役職につくよう誰かから推薦される」という意味の二通りである。前者は「受身の主体」（「推薦する」にのっての動作主、「相手」の一種）であり、後者は「役割」（「目的規定」の一種）である。複数の関係を想定することができるものである。

丸山（2011）において、多重性のある格情報として次のような型をまとめた。

型	名詞	格助詞 (表層格)	動詞の語義	名詞と動詞の意 味関係(深層格)	例
A-1	同じ	異なる	同じ	同じ	試合で／に勝つ
A-2	同じ	異なる	同じ	異なる	目標を／に置く
B-1a	同じ	同じ	異なる	異なる	パンを焼く
B-1b	同じ	同じ	同じ	異なる	アメリカに学ぶ
B-2a	異なる	同じ	異なる	異なる	ボール／要求を蹴る
B-2b	異なる	同じ	同じ	異なる	体／汗を拭く

ある程度例を挙げて論じたが、更に網羅的に記述する必要がある。

5. 4. 中核的格か周辺の格か、必須格か任意格か

格によって、中核的か周辺の格か大体決まって来るものもある(丸山(1990)参照)。だが、多くは、動詞によって必須か任意かが変わってくる。デ格はその多くが周辺の格であるが、『新明解国語辞典』(三省堂)や『日本語新辞典』(小学館)における格パターン記述において「一デ」という形で記載されることもある。576語の基本動詞について調査した際、次のような結果を得た(丸山:2007)。

- a. 『日本語新辞典』にも『新明解』にも、格記述にデ格の記述があるもの(13語)
- b. 『日本語新辞典』にはあり、『新明解』は括弧書きのもの(46語)
- c. 『日本語新辞典』にあるが、『新明解』にはないもの(13語)
- d. 『日本語新辞典』になく、『新明解』にあるもの(12語)
- e. 『日本語新辞典』になく、『新明解』に括弧書きであるもの(55語)

計139語の動詞にデ格の情報が付加されていたことになる。「内容物」「付着物」は記述されている場合が多かった。デ格の中で必須度が高いと言える。辞書にどのような記載が必要かということも含めて、網羅的調査・報告が必要である。

5. 5. 格成分か副詞成分か、動詞にかかるか文にかかるか

丸山(2010)において、「役割」の成分に二通りあることを指摘した。

- 1) 名詞+「に」が「〈役割〉の二格をとる動詞」にかかる二格成分となる

「秘書に雇う」「候補者に選ぶ」「嫁にもらう」「嫁にやる」等

- 2) 〈役割〉誘導名詞+「に」で副詞的成分となる

「記念に」「お礼に」「代わりに」等

後者は若干説明が必要であろう。「お礼に歌を歌います。」の場合、「歌う」という動詞が役割の二格を要求するわけではない。「歌を歌うこと」が「お礼」になる

ということである。

動詞が要求する格成分として存在するものと、もっと大きく係るものがある。それは「役割」に限らない。場所・時の成分は、状況成分として大きく係るものが多いが、述語によっては必須度が高い。

必須格か任意格か、格成分か副詞的成分か、動詞にかかるのか文にかかるのか、このあたりはある程度連続的である。

6. まとめと今後の課題

筆者は丸山（2015）において、コーパスにおける格助詞の使用実態を調べ報告を行った。レジスター（ジャンル）によって、格助詞の使用状況はかなり異なる。次の段階として、レジスターごとの深層格の分布を見ようとしたところ、深層格の設定法によって、かなり結果が異なることに気づいた。そこで、どのような問題点があるか明らかにしようとしたのが本稿である。今後、大まかな枠組みは記述文法研（2009）を改変したものを基にするが、研究者によって捉え方が分かれるもの、複数の捉え方ができるものの記述法を工夫していきたいと考えている。

文献

- 石綿敏雄（1999）『現代言語理論と格』ひつじ書房。
- 奥田靖雄（1983）「に格の名詞と動詞とのくみあわせ」「で格の名詞と動詞とのくみあわせ」『日本語文法・連語論（資料編）』言語学研究会編、むぎ書房。
- 加藤重広（2003）『日本語修飾構造の語用論的研究』ひつじ書房。
- 国立国語研究所（木村睦子）（1997）『日本語における表層格と深層格の対応関係』国立国語研究所報告 113, 三省堂。
- 仁田義雄（1986）「格体制と動詞のタイプ」『ソフトウェア文書のための日本語処理の研究 7 — 計算機レキシコンのために（2） —』情報処理振興事業協会。
- 日本語記述文法研究会編（2009）『現代日本語文法 2 第3部 格と構文 第4部 ヴォイス』くろしお出版。
- 松田真希子（2014）「二格深層格の定量的分析」『言語処理学会第20回年次大会発表論文集』516-519。
- 松田真希子（2015）「Web 日本語 N グラムコーパス分析に基づく深層格の偏りの検証」『計量国語学会第59回大会予稿集』43-48。
- 丸山直子（1990）「格助詞と格と結合値」『計量国語学』17 [4], 169-192。

- 丸山直子 (2007)「辞書記述のためのコーパス利用 動詞の格情報とその記述法」『特定領域研究「日本語コーパス」平成 18 年度研究成果報告書」.
- 丸山直子 (2010)「助詞「に」を伴う＜役割＞成分——コーパスに基づく分析——」『日本語文法』10 [1], pp.71-87.
- 丸山直子 (2011)「動詞の格情報——国語辞書の記述とコーパス——」『東京女子大学日本文学』107, 227-245.
- 丸山直子 (2015)「コーパスにおける格助詞の使用実態——BCCWJ・CSJ にみる分布——」『計量国語学』30 [3], 127-145.
- 水谷静夫 (1996)「現代語の格 試論」『計量国語学』20 [7], 283-303.
- 村木新次郎 (1991)『日本語動詞の諸相』ひつじ書房.
- 森山新 (2008)『認知言語学から見た日本語格助詞の意味構造と習得——日本語教育に生かすために——』ひつじ書房.
- 森山卓郎 (1988)『日本語動詞述語文の研究』明治書院.
- 山梨正明 (1993)「格の複合スキーマモデル——格解釈のゆらぎと認知のメカニズム」『日本語の格をめぐる』仁田義雄編, くろしお出版.

(まるやま なおこ 本学教授)